

論文審査の結果の要旨

氏 名	陳 高峰
論文題目	村上春樹の「総合小説」と物語論
要 旨	
陳高峰君の「村上春樹の「総合小説」と物語論」は、現代日本の名高い作家村上春樹に眼をつけ、その数多くの作品を読破し、先行研究を踏まえたうえで、村上文学の全貌を見わたして、「総合小説」という観点を樹立したが、かなり高く評価することが出来るのである。まず五作品についての先行論文をおさえて、政治的な要素について、他の作品や日本近代史の文献を参考にしながら論究している点に、独創性がある。 第一章では、以上の論点により、村上氏の最初の「総合小説」が『羊をめぐる冒険』と『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』であると認識し、その「総合小説」の一面として、さらに作中にあらわれた各種の社会事件に注目し、政治的要素が数多く含まれると指摘した。つづいて、先行研究の論文を引用して、二作の構成上の「二重構造」や表現手法の多種運用などを分析したところ、従来の先行研究では、村上文学が政治性を持っていることがほとんどとりあげられなかったと言明した。新鋭研究者としては、優れた見識だといえよう。ただし、政治要	

素は総合小説との関連性、あるいは、どういう理由で、単独的に「政治」の要素を析出させ立論するのか、この方面の説明は、やや不十分が見られる。

第二章では、やはり同様の「総合小説」論のうえに立脚して高度資本主義発展期に出版された『羊をめぐる冒険』の続編としての『ダンス・ダンス・ダンス』を述べ、その社会批判性に焦点を絞り、作中の登場人物「僕」「羊男」「キキ」らの絡み合う関係を深く分析したうえで、かれらは、「何れもこの高度資本主義社会の救いのない悲愴感と手ごたえの乏しい空虚感だけ」に支えられ、無意味な結末へと頹廃していくものだと指摘した。そのパフォーマンスの舞台とする作品そのものが社会を批判する小説であることに帰結されたというものである。これもやはり論者の独特の識見ともいえるが、問題は文学作品のいわゆる「政治性」は、ほとんど人物と物事の影に隠蔽され、かなり抉り出しがたいが、どのような視点、どのような角度から見出すのか、説得力を持つ論述することが望ましい。

第三章では、前章にふれた村上文学の批判性の延長線として、『ねじまき鳥クロニクル』三部作に関する一部の政治的な要素、ノモンハン戦争などに着眼し、関連資料を調べながら、物語や歴史の中にある政治性を読み解いた。村上が天才作家の責任より出発し、多くの日本人に知らさ

れないノモンハン戦争を通じて、現代人の良知を喚起するために、この戦争を小説の中に取り上げたことに論及し、反戦の色彩が濃いと語った。一方、その作品の中には、政治家たちの偽りや政治批判、戦争批判などの政治要素がたくさん含まれていると指摘し、『ねじまき鳥』三部作は、社会状況に即して、さまざまな政治風潮や時代の動きに反発した作品であるという結論を得た。論拠はかなり十分で、作中人物に対する分析は詳しく、結論も着実である。

第四章では、「9・11」事件の後に書かれた国際的な影響力を持つ長編小説『海辺のカフカ』をめぐって、いわゆる「謎だらけな問題作」という従来の論評の段階にとどまらず、さらに「政治の季節」と呼ばれる学園闘争の記述や戦争の影、天皇の戦争責任、家庭内暴力などに目を注ぎ、作中人物がそれにかかわる諸要素、特に政治的な要素に強い関心を寄せ、作品の広範囲の社会性を探究した。その中で、日本戦後史の認識については、作中人物の言動に依拠し、小森陽一氏を始めとする日本人研究者たちの「天皇の「人間宣言」のねらいは、自分の一連の侵略戦争の開戦をめぐる戦争責任を逃れるための免罪符にしようとしているわけです」という論断をとらえて、『海辺のカフカ』一作を作者村上の内心につながる通路に持ち上げ、村上文学の現実性と社会認識論の代弁作という観点がみられるのである。研究者として、このような学術探求精神は、評価

に値する。

第五章では、規模最大な長編小説『1Q84』を取り上げ、それに含まれた諸事件や諸人物に注意を傾け、前の各章と同じように、引き続き「総合小説」を「綱」にし、「政治要素」を「目」にして、論述を展開している。それにより、『1Q84』を村上文学の頂点に達する作品であると指摘するとともに、失敗作や欠落だらけなどの諸論評を乗り越えて、村上が一貫して、作品に付与した日本社会への批判的な精神を強調し、再認識した。

第六章では、ふたたび各重要時期に書かれた作品をたどりながら、村上文学の表現手法に属する「物語論」について、論述を進めている。つまり、作者にとって、小説に欠かせない表現手法としての物語という属性を生かし、それを人間交流の手段として高め、人の内心に通い、簡単に趣味深い言葉で、深刻な理念を伝達する利器であると認識した。また、村上春樹の物語論について、「マジック・リアリズム」というスタイルを考察している。村上春樹にとっての小説を書く意味について、「まず人に読みたいと思わせ、人が読んで楽しいと感じるかたち、そういう中でとにかく人を深い暗闇の領域に引きずりこんでいける力をもった」小説という形でしか語れないことを語ることでであると結論した。末一章でありながら総括意味を含む一章も兼ねるが、論文全体の重みから見ると、こ

の一章の分量は、やや軽いようである。というのは、作品論については、一般に内容と表現という両面に跨るものであるが、論文構成の上で、必ずしもあらゆる方面には及ばないものの、両方にも触れるなら、相当なバランスをとる必要があるのではないかと思われる。

総じていえば、論文の構成に多少堅実さを欠き、近代文学研究に慣用される方法論の利用は、まだ不十分であり、村上文学そのものより出発する学術成果の参照も足らず、あれこれ改進する余地があるが、にもかかわらず、先行研究をふまえた手堅く丹念な論評や、新鋭研究者の独創的な視点から村上文学についての綿密な分析を通じて、作家の創作理念とその文学活動の実質を解明しようとした試みは、高く評価することができる。とくに、第二言語である日本語を、相当程度深く読み解く力を持ち、村上作品を何度も精読しているとともに、微細な箇所までをも熟知し、何よりも、村上文学に対する深い愛情を持っていることは、ありがたいものである。当前、村上ブームが盛んな中国では、広範な読者層や研究者たちに対して、重要な指導的役割を果たすことが疑いないと信じている。

以上の所見から、本論文は、博士学位申請論文として十分なレベルに達していると判断する。

5 6 6